

Harriet Martineau と Jane Marcet

——対話から物語へ——

松本 三枝子

序 Harriet Martineau (1802-76) と Jane Marcet (1769-1858) の関係

産業革命後のイギリス社会では貧富の格差や、労働者階級と中流階級の対立、さらには貧困問題等、国家を二分する社会問題が山積していた。ハリエット・マーティノーはこれらの社会問題を解決するためには、国民全体がこれらの社会問題の原因を理解することが不可欠であると考えていた。彼女はそのためには当時の新しい学問であった *political economy* (経済学) が有効であり、それを一部のエリートのみならず、広く国民に普及し情報を共有する必要があると考えた。この時代の高等教育から排除されていた女性や労働者を対象に、彼女が書いた物語による経済学の手引書が、*Illustrations of Political Economy* (『経済学例解』1832-34) である。

一方、ジェイン・マーセットも当時まだ普及していなかった経済学の手引書 *Conversations on Political Economy in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained* (『経済学対話』1816) を若い人々を対象に書いた。マーセットはこれに先立ち、*Conversations on Chemistry in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained and Illustrated by Experiments* (1806) を出版し、すでに一定の成功を収めていた。マーセットの『経済学対話』では、タイトルとなっている「対話」からも推測できるように、家庭教師の Mrs. B と女生徒の Caroline の「問答」により経済学が解説されるという形式をとっている。

このように経済学を普及するために、それぞれの方法で手引書を書いた二人の女性作家であるハリエット・マーティノーとジェイン・マーセットを中心に本論では議論する。先行業績については、Mark Blaug 著 *Ricardian Economics* (1958) や、Bette Polkinghorn、Dorothy Lampen Thomson 著 *Adam Smith's Daughters* (1998) 等があるが、本論では主に彼女らの手引書にお

ける表現形式である対話 (dialogue, conversation) と物語 (fiction, narrative, tale) の役割に注目することで、新たな視点から二人の作家を比較研究する。

研究対象とするのは、マーセットの *Conversations on Chemistry in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained and Illustrated by Experiments* (1806)、*Conversations on Political Economy in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained* (1816)、及びマーティノーの *The Rioters; Or, A Tale of Bad Times* (『暴徒、または不況時の物語』1827)、*The Turn-Out; Patience the Best Policy* (『同盟罷業、忍耐が最善の策』¹⁾ 1829)、*Illustrations of Political Economy* (1832-34) 等を主要なものとする。

I 女性作家の社会貢献—経済学の手引書

二人の作家が活躍した19世紀前半において、イギリス社会は家父長制の時代であり、男女の性別役割分業は厳格であった。そのような時代背景の中で、マーセットやマーティノーはなぜ経済学の手引書を書こうとしたのか。まず彼女たちの社会的、文化的背景から検討していこう。

マーセットは、裕福なスイス人の銀行家の娘として、ロンドンに生まれた。当時の大半の女性同様に、彼女の教育は家庭教育であったが、数学、化学、生物学、天文学、哲学等にも及ぶ、当時の女子教育としてはきわめて恵まれたものであった (Polkinghorn, *Uncommon Woman* ch. 1)。スイス人の医者と結婚後もロンドンに住み、王立協会に所属し化学にも関心が深い夫を通して、当時の多くの科学者の知己を得ることになる。王立科学研究所での講演に夫とともに出席する等して、化学の知識を修得しそれを発展させ、化学の手引書を書くに至る。彼女が最初に書いた手引書が女性を対象としており、その内容が化学であること理由は、この学問が当時もっていた特徴から推測可能である。この時代、化学は現在では考えられないほど流行した学問であった。さらに、実験を必要とするこの学問を学ぶことは、裕福で時間のある男性に限られていた。医者であり化学者でもあった夫は自宅に実験室を所有しており、妻であるマーセットもその実験室を使用できたのである。正確に言えば、彼女は化学者ではないが、王立協会員であり医学者であった夫を持ち、その交友関係から最先端の化学の知識や Humphry Davy を始めとする著名人の知己を得た人物である。

彼女が最初に書いた手引書 *Conversations on Chemistry in Which the*

Elements of that Science are Familiarly Explained and Illustrated by Experiments にも、彼女の意図が明確に表現されている。本来紳士の学問であった化学を、女性を対象に解説したのが本書である。その手引書の冒頭で、彼女は次のように書いている。

In venturing to offer to the public, and more particularly to the female sex, an Introduction to Chemistry, the author, herself a woman, conceives that some explanation may be required; and she feels it the more necessary to apologize for the present undertaking, as her knowledge of the subject is but recent, and as she can have no real claims to the title of chemist. (Marcet, *Chemistry* 1:v)

匿名で出版されたこの手引書は、大変好評であったのだが、マーセットの控えめな自己表明が印象に残るものである。注目すべきは、女性による女性のための手引書であると言明している箇所である。その企画意図に沿って、本編でも家庭教師のB夫人が女生徒に教えるという形式をとっている。つまり、当時の規範的な中産階級の女子教育の在り方に沿って書かれたものである。

これは本論で扱う *Conversations on Political Economy in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained* でも同様である。マーセットは経済学者として書いているわけではなく、あくまでも入門書を初学者のために書いていることが次の言葉から明らかである。

In offering to the Public this small work, in which it is attempted to bring within the reach of young persons a science which no English writer has yet presented in an easy and familiar form, the author is far from inferring from the unexpected success of a former elementary work, on the subject of Chemistry, that the present attempt is likely to be received with equal favor. (Marcet, *Political Economy* v)

依然として匿名での出版であるが、好評であった前書『化学対話』の著者であることを明らかにし、作家としての系統性とその成功を主張する序文である。ただし、ここでは対象となる読者を女性に限定せず、若い人々としている。つまり、当時新しい学問であった、経済学を初めて学ぶ若い人々

に向けた手引書として『経済学対話』が書かれたことがわかる。その本編では前書と同様に家庭教師と女生徒の問答により、経済学が学べる形式を用いている²⁾。

興味深いことは、女生徒が一定の知識や意見を持っている前提で問答が続いていることである。例えば、キャロラインが次のように家庭教師に不満を述べる箇所がある。

CAROLINE. Well, after all, Mrs. B., ignorance of political economy is a very excusable deficiency in women. It is the business of Government to reform the prejudices and errors which prevail respecting it; and as we are never likely to become legislators, is it not just as well that we should remain in happy ignorance of evils which we have no power to remedy? (Marcet, *Political Economy* 11)

キャロラインは、女性が経済学を知らなくても、立法者になるわけではないので、その無知は許されると主張している。B夫人はこれ対して、無知を擁護するとき、あなたは誤っていると返答している (Marcet, *Political Economy* 11)。当然のことだが、B夫人の背後には著者であるマーセットが存在しており、彼女は序文で次のように経済学の必要を述べている。

Political Economy, though so immediately connected with the happiness and improvement of mankind, and the object of so much controversy and speculation among men of knowledge, is not yet become a popular science, and is not generally considered as a study essential to early education. This work, therefore, independently of all its defects, will have to contend against the novelty of the pursuit with young persons of either sex, for the instruction of whom it is especially intended. (Marcet, *Political Economy* v-vi)

マーセットによれば、経済学は様々な議論はあるものの、人類の幸福と発展に寄与する学問として若者に必要なものであるとしている。この点に関しては、『経済学対話』の本編においても、B夫人がキャロラインに経済学は富についてのみならず、道徳についても深く関係していると次のように強調している。

MRS. B. ... I can assure you that they [principles of political economy] all tend to promote the happiness of nations, and the purest morality. Far from exciting an inordinate desire of wealth or power, it tends to moderate all unjustifiable ambition, by shewing that the surest means of increasing national prosperity are peace, security, and justice; that jealousy between nations is as prejudicial as between individuals; that each finds its advantage in reciprocal benefits; and that far from growing rich at each other's expence, they mutually assist each other by a liberal system of commerce. (Marcet, *Political Economy* 23–24)

B夫人の役割はあくまでも教育者であり、その内容も国家間はもちろん人間相互における融和や幸福を増進することに寄与するものとして経済学を授けようとしている。当然このB夫人の役割とマーセット自身の読者への役割は重なっている。

しかしながら、序文の最後で、謝辞に代えて、彼女が“great masters”としてわざわざ名前を列挙しているのは、Adam Smith、Thomas Malthus、Jean-Baptiste Say、J. C. L. Simonde de Sismondiであり、自分をあくまでもその紹介者と位置付けている。この作法は、自らの役割を教育、若者への支援や援助に限定することで、伝統的な女性の役割の延長として、女性作家の著述を受け入れやすくするものである。つまり、マーセットの『経済学対話』は、その表現様式も含めて、伝統的な女性の役割を意識して書かれていると考察できる。

マーセットは夫や夫の交友関係の中で執筆を続け、その『対話』シリーズにより成功した作家として一生を終えている。しかしながら、現在では彼女に関する研究は極めて限られている。先行業績として列挙したブローグの『リカード学派の経済学』や、ポーキングホーンとトムスンの『アダム・スミスの娘たち』、Bette Polkinghorn 著 *An Uncommon Woman* (1993) 等が主要な研究書となる。最初の二書はマーティノーについても扱われているので、研究書としてマーセットを単独で研究対象としているのは、最後のポーキングホーンの『非凡なる女性』となる。

対照的に、マーティノーは帝国主義研究などの観点からも、近年再評価が進んでいる。マーセットが娘時代も、結婚後も恵まれた家庭環境で一生を終えたのとは異なり、マーティノーは自立した作家として歩む必要が

あった。マーティノーはノリッジの織物製造業者を父に持ち、ユニテリアンの家庭に育った。弟にはユニテリアン派の神学者である James Martineau がおり、彼女が受けた教育も当時としては恵まれたものといえる。しかしながら、不景気により父親の織物業は経営破綻し、彼女は経済的に自立することを求められた。通常であれば、この時代の中産階級の女性が経済的自立を求められたときにつく仕事は家庭教師であるが、聴覚障害があった彼女は、執筆で生計を立てようとしている。そのような状況の彼女を援助したのが、ユニテリアン派の機関誌 *The Monthly Repository* の編集者であった。彼女が『経済学例解』を執筆することになった経緯を彼女は『自伝』で次のように書いている。

It was in the autumn of 1827, I think, that a neighbour lent my sister Mrs. Marcet's "Conversations on Political Economy." I took up the book, chiefly to see what Political Economy precisely was; and great was my surprise to find that I had been teaching it unawares, in my stories about Machinery and Wages. It struck me at once that the principles of the whole science might be advantageously conveyed in the same way, —not by being smothered up in a story, but by being exhibited in their natural workings in selected passages of social life. (Martineau, *Autobiography* 1: 138)

マーティノーがここで明らかにしている重要な点が二つある。第1は、マーセットの『経済学対話』を読んだことで、彼女が『経済学例解』を書くことになった経緯である。つまり、自らの先達としてマーセットの存在を認めている。第2は、これ以前に彼女が書いた機械と賃金についての物語は、経済学とは気づかずに経済学について書いていたということである。ここでマーティノーが言及している二つの物語とは、『暴徒』(1827)と『同盟罷業』(1829)である。このようにマーティノーはマーセットからの影響を明言しながらも、『経済学例解』(1832-34)よりも先に書いた二つの物語について、自らの独自性と先見性を主張しているのである。

何よりもマーティノーの独自性は、物語による解説という形式を用いたことである。この点に関しては、『経済学例解』の序文において、彼女自身が次のように述べている。

The reason why we choose the form of narrative is, that we really think it the best in which Political Economy can be taught as we should say of nearly every kind of moral science. Once more we must apply the old proverb, “Example is better than precept.” We take this proverb as the motto of our design. (Martineau, *Illustrations* 1:xiii)

「実例は教訓に勝る」という古い諺をわざわざ引用して、自らの手法を推奨している。『自伝』からの先の引用と合わせて考察すれば、経済学の原理をそのまま解説するのではなく、社会生活の中で、実際にどのように経済学の原理が機能しているのかを描くことが、専門的な知識を持たない女性や労働者に理解しやすいと考えたということである。

マーティノーが、最初の物語『暴徒』を書く契機となったのは、彼女自身が、当時の新聞に掲載された機械打ちこわしの記事に心を動かされたことであった (*Autobiography* 1: 135)。織物製造業者であった父親の破産も、彼女にとり経済学の知識が単なる机上の学問ではなく、日常生活を左右する身近な学問として感じられたことも指摘しておきたい。マーセットは『経済学対話』を労働者が読むことを想定していないが³⁾、マーティノーは『経済学例解』を、労働者階級にこそ読んでもらいたかったのである。なぜなら、彼女はこの時代に深刻になっていた階級対立の解消には、労働者と資本家の相互理解が不可欠と考えていたからだ。

こうして二人を比較研究してわかることは、マーセットの『経済学対話』があくまでも経済学の普及をその目的としていた一方で、マーティノーの『経済学例解』は経済学の普及を通して、19世紀初期のイギリス社会が直面していた社会問題の解決を目指していたということである。後にマーティノーが “governess to the nation” (Hunter 38, Scholl 136) と称されたように、彼女は教育を通して社会変革を目指していたことになる。それゆえ、マーティノーにとり学問の大衆化は喫緊の課題であった。

次章では、マーティノーが選択した、物語による専門的知識の大衆化という点についてさらに考察したい。

II 対話から物語へ

i) なぜ物語を選択したのか

専門的知識を大衆化する方法に関しては、マーティノーは明確に自分なりの意見があった。それは、『経済学例解』の序文でも本書の必要性を次のように述べているからだ。

There are a few, a very few, which teach the science systematically as far as it is yet understood. These too are very valuable: but they do not give us what we want—the science in a familiar, practical form. (Martineau, *Illustrations* 1:xi)

他にも絵のように見ればすぐにわかるものなどの表現もあり、“illustration” (例解、解説) へのこだわりが感じられる。彼女がなぜ物語に執着したのかについては、いくつか理由が考察できる。

第1には、“conduct book”の流行が挙げられる。特に新興中産階級の女性たちを対象に、道徳的作法を教える「手引書」は18世紀後期から19世紀初期に非常に多く書かれた作法本であった。マーティノーが意図したのは、経済的作法であり、それが新しい時代に求められた道徳的作法でもあった。Brian P. Cooperも *Family Fictions and Family Facts* において、次のように分析している。

We could also read the short novels as economic allegories or extended parables. Martineau designed the stories as primers on proper economic behavior; readers were to take the lessons as guides for individual and institutional reform. To reduce the complexity of social relations to fit the demands of realistic fiction and deductive political economy, Martineau embodies principles, good and bad, in representative types, characters who would act out these principles in plots derived from real life. (Cooper 114)

クーパーによれば、読者はマーティノーの短い物語を経済的寓話として読み、それを適切な経済的態度をとるための入門書として、自己改革あるいは制度改革に役立てることができる。これがまさに作法本として、『経済

学例解』の人気を支えたものであり、新しい学問の学びが、実際の生活の中で活用されることを保証するものでもある。

マーティノーが物語形式を選択した第2の理由は、経済理論に感情を吹き込むことにより、読者に親近感を生じさせることであった。読者に女性や労働者などを想定した場合、物語化による登場人物への親近感は、経済理論へのそれよりも明らかに得やすいものである (Dalley 105-106)。科学に疎遠な読者であっても、短い物語を読むことには慣れているのが通常であるからだ。

第3の理由は、経済理論が、社会生活の中で、いかに機能するかを具体的に描くことにより、経済学が机上の学問ではなく、“reality”を持つものとして説得力を帯びてくることである。読者は物語の中に自らが生きる同時代の社会状況を見出し、客観的に経験することで、新しい考えを学び、自己変革を求められることになる。

第4に、マーティノー自身は認めていないが、Hannah More の影響である。18世紀末のフランス革命の影響による社会不安を沈静化するために、ハナ・モアが書いた *The Cheap Repository Tracts* 等の影響である。モアの物語集も貧しい人々を対象に書かれており、マーティノーとの共通性については論じたことがあるので、本論では言及しない (松本「Martineau と More」)。ただし、政治的には、モアは国教会福音派の信徒として、体制維持のために物語を書いている。一方、ユニテリアンのマーティノーは、モアとは異なり社会改革を目指して物語を書いている。しかしながら、モアの物語による危機的な社会状況の解説とそれに対する処し方の勧めは、マーティノーの構想に重なるものである。見方によっては、マーセット以上にモアの存在はマーティノーに影響を与えたものと考察できる。しかしながら、マーティノーが自らの先達として、マーセットを認めておきながら、モアを認めないのは、後者の保守的政治傾向と現状認識の相違によるものと考えられる。

以上のように、経済学を物語により解説することになった理由を分析したところで、次に、具体的にどのように物語として、経済学が解説されているのかを見ておこう。

ii) 経済学の手引書としての物語

マーティノーによれば、『暴徒』(1827)、『同盟罷業』(1829) を書いた

時点では、経済学については知らずに、経済学について書いていたということであるが、これらの物語も本論では含めて考察していく。特に、これらの物語の後に書かれた『経済学例解』(1832-34)との相違が指摘できれば興味深い比較研究になると考えるからである。とりわけ、『同盟罷業』と『経済学例解』に収められている *A Manchester Strike* は、賃金とストライキを同様に扱っている物語であり、テーマとしては共通している。

『同盟罷業』の冒頭は、賃金支払いの場面である。賃上げを求める労働者代表の Henry Gilbert と工場経営者である Robert Wallace の次のような会話で始まる。

“On what pretence do you make this demand?” enquired Mr. Wallace.

“Because our labour is not paid as it deserves,” replied Gilbert, “and because wages have often been higher, when provisions were cheaper than they now are.”

……

“We made up our minds long ago, as you know, Gilbert; and I told you our reasons last week. If you think that threats will frighten us, you are mistaken.”

“I do not threaten any further mischief Sir, than can’t be helped, if you go on to deny us what we think we have a right to. We have made up our minds, too; and we will not come any more to work till you give us the wages we demand.”

“I am sorry to hear this, Gilbert. The inconvenience to us will be very great; but, depend upon it, you will suffer the most, in the end.” (*Turn-Out* 71)

長い引用を取ってしたのは、ここにこの物語が読者に伝えたい内容が要約されているからである。つまり、物価に見合った、労働に見合った賃金を貰っていないという理由で賃上げを求める労働者側と、景気により商取引には浮沈があり、賃上げは現状ではできないとする経営者側の対立がこの物語のテーマである。賃上げを求めて同盟罷業を決意する労働者たちに対して、経営者は、それにより最も苦しむことになるのは、経営者よりもむしろ労働者自身であると警告している。端的に言えば、ストライキは賃上

げのためにはならず、むしろ労働者自身を苦しめる結果となるということである。物語は、これを実証するために直線的に進んでいく。

ストライキをするための資金援助を求めて、ギルバートは他の産業都市の組合を巡回していく。一方、極めて困窮している労働者は、ストライキのために休業するよりも、僅かでも収入を得るために、働き続けたいと考えている。例えば、結婚を目前にした弟の James Gilbert は休業すれば収入が途絶えるため、ストライキを決意できないでいる。賃上げを求めることでは一致しているものの、ストライキを実行するか否かについては、労働者側も一致していないという現状がギルバート兄弟の対比を軸に描かれていく。賃上げを望みながらも、ストライキを決断できないでいる労働者たちを組合側が説得できるのか、あるいは経営者側が彼らを懐柔して操業を継続するのか、その攻防が物語内の展開である。

ここに登場する経営者であるウォレスは、合理的な思考と温情を併せ持った人物として造形されている。彼は、『暴徒』の語り手である商人や、『マンチェスター・ストライキ』に登場する経営者の Wentworth に通じる人物であり、これらの物語の著者であるマーティノーの考えを代弁している。

19世紀初期のイギリスでは、資本家と労働者の対立は激化していた。1810年代には工場労働者の騒乱が激化し、ピータールーの虐殺（1819）に至る。1824年に組合の団結を禁止する団結禁止法が撤廃され、Friendly Union of Mechanics（1825）、Grand Union of Spinners（1829）等の組合が次々に組織されている。労働者側は資本家である経営者に対して、団結して労働者側の権利を主張する状況であった。ストライキはそのような労働者側の権利主張を有利に運ぶための有効な手段と考えられていた。

しかしながら、マーティノーの物語はいずれもそれを根底から否定している。例えば、『同盟罷業』では、経営者のウォレスが、ストライキを視察するために旅に出たヘンリ・ギルバートの弟のジェームスと次のような会話を交わしている。

“I [Mr. Wallace] am glad your brother is going there; he may see enough to make him tremble for the consequences of what he is doing here. But the fund must be a large one, if it will bear these travelling-expences in addition to the other calls upon it.”

“But I forgot to say, Sir, that the chief purpose of the journey is to collect money. They say, that there are funds in many places, for the purpose of supporting a turn-out, and that we shall get help now; and then, when we have got high wages again, we are to subscribe to support those who help us now, if they should have to turn-out.” (*Turn-Out* 85)

ヘンリは労働組合の代表として、ノッティンガムやダービーへ向かった。彼の目的は、ストライキを実行している地域の視察と、組合の資金集めを兼ねたものであることがわかる。経営者のウォレスは、ヘンリが実際にストライキの実状を知ることにより、経営者のみならず、労働者にも害をなすことを認識すると考えていることがわかる。

一方で、旅の途中で出会った紳士から、ヘンリは低賃金の原因は、労働力の過剰と聞かされる (*Turn-Out* 92)。この紳士とヘンリの会話は、物語後半における、ヘンリとウォレスの集会での対話の伏線となっているので、二人の会話を見ておこう。

“I can’t help thinking, the masters might prevent or remedy a great deal of the evil, if they choose,” replied Gilbert.

“In what manner? I am sure it would be a most acceptable secret for them to learn; for *their interests are the same as those of their men.*”

“The same as their men, Sir!” exclaimed Gilbert. “Do you mean that it is no advantage to the masters to pay low wages, while they are putting large profits into their own pockets?” (*Turn-Out* 94, emphasis added)

紳士の主張する「経営者の利益と労働者の利益は同一である」との意見に、ギルバートは驚き、反論している。しかしながら、そもそもマーティノーが『同盟罷業』や『マンチェスター・ストライキ』を執筆した主要な目的はまさに、経営者である資本家と労働者の対立の解消であった。この2者の利害が対立すると考えられていた当時の労働者側の思想を根底から否定して、2者の利害は一致するというのが、マーティノーが一貫して主張しているものである。それは『同盟罷業』の結末で、経営者側の代表として、ウォレスが、労働者側の代表としてギルバートが論戦する場面でも再三にわたって示されている。ウォレスが次のように発言している。

“Generally speaking, the fortunes of masters and men rise and fall together, and their interests are eventually the same. When times are bad, it is for the good of both that they should try, by all possible means, to keep the capital of the masters entire; or, if they cannot do that, to consume as little of it as possible.” (*Turn-Out* 123)

“I [Wallace] repeat, that your interests and ours are the same; that when we make good profits, you get high wages; and that, by insisting on high wages when trade does not afford them, you bring your masters to poverty, and yourselves to destruction.” (*Turn-Out* 125)

最初の発言では、ウォレスは客観的に労使関係を述べているが、後者では自分とギルバートら労働者との直接の関係として、自らの議論を敷衍している。つまり理論を演繹している場面である。彼の理論は労使協調路線の最たるものであり、組合によるストライキを根底から否定するものとなっている。これは、『同盟罷業』に限定された特徴ではない。

マンチェスターにおける労働者問題を扱った社会小説に、Elizabeth Gaskell が書いた *Mary Barton: A Manchester Life* (1848) がある。この小説は労働者たちの貧困に読者が目を向けるように意図して書かれたものであるが、そこでもやはり、組合によるストライキなどの労働者運動は否定的に描かれている。

そして、マーティノーの『マンチェスター・ストライキ』においてもこの労使協調路線は堅持されている。そもそも、この物語は、賃上げに有効と考えられていた組合運動であるストライキが、いかに経営者のみならず、労働者自身にとっても損害を被ることになるかを描いたものである。組合の指導者であり、理性的な労働者でもある William Allen が労使協調を認識しながらも、組合の幹部として、ストライキを指揮し、賃上げに失敗し、復職にも失敗して、全てを失い最下層の街路の掃除夫にまで身分を落とす物語である。労働者側と対立する経営者のウェントワースが次のように説得している。

“... I doubt whether a strike is one of the means which will gain your point. It will leave your case worse than in the beginning, depend upon it. A

strike works the wrong way for your interest. It does not decrease your numbers, and it does decrease the capital which is to maintain you.”
(*Manchester Strike* 60)

ウェントワースが低賃金の理由を、労働者数の過剰と分析していることがわかる。これは前述したように『同盟罷業』に登場するヨークシャーの紳士と同一の考えである。賃上げのためにストライキをすることは、無益であり、むしろ資本を疲弊させることになり、雇用はさらに減少するという主張である。こうして分析して明らかになることは、『同盟罷業』においても、『マンチェスター・ストライキ』においても、マーティノーが繰り返して書いていることは、ストライキによる労使双方への損害である。この思想の根底には、資本家と労働者の利害が、当時考えられていたように対立するのではなく、同一であるというものだ。それゆえに、『同盟罷業』において、ストライキを実行したヘンリ・ギルバートも、『マンチェスター・ストライキ』により心ならずもストライキを指揮したウィリアム・アレンも同様に、物語の結末では、失職し、ストライキの前よりも貧困状態は悪化する。

以上の分析により、経済学の手引書として読んだ場合には、『同盟罷業』と『マンチェスター・ストライキ』は、明らかに同様の目的のために書かれている。しかしながら、前者は、出版社から数ポンドが支払われたのみであるが、後者は『経済学例解』のシリーズの一卷として大きな影響を与えるものとなっている。その影響力の相違はどこから生じたものなのであろうか。

手引書として物語を書いたマーティノーであるが、物語とは文学であり、19世紀のイギリスにおいて、文学を楽しむこととはまさしく余暇活動の主演であった。それゆえ「例解」を物語により行うことの意味について、次章でさらに分析したい。

III 文学としての「例解」

前述してきたように、マーセットの手引書が、B夫人と女生徒の対話によるものであり、マーティノーの『同盟罷業』、『経済学例解』が物語による経済学の手引書となっていることを明らかにしてきた。この二人の作家

の手引書は対話と物語という異なる表現形式により成立しているともいえるのだが、前章で分析したように、マーティノーの物語においても、重要な点は資本家と労働者による対話により語られている。しかも、それらはほとんどすべて直接話法で表現されている。

特に、『経済学例解』に先立つ『同盟罷業』においては、登場人物の数も限定的であり、資本家であるロバート・ウォレスと労働者のギルバート兄弟の対話が中心になっている。マーセットの場合には、家庭教師のB夫人と女生徒のキャロラインの対話であるが、それが資本家と労働者の対話に置き換えられているというものである。つまり十分な知識を持つ教師として資本家が、労働者に新しい思想を教え、労働者の考え方の偏見や思い込みを修正するという構成となっている。

ただ、マーセットの『経済学対話』が、女教師と女生徒の対話に終始して、構成としては単調であるのとは異なり、マーティノーの場合は、『同盟罷業』でさえも、物語としての舞台設定があり、登場人物が描写されている。つまり読む楽しさとしては、格段に向上しているのである。このように、マーセットとマーティノーの手引書の違いと共通性を分析した後に、マーティノーの『経済学例解』の分析をさらに深めたい。なぜなら、その前作の『暴徒』や『同盟罷業』とは異なる特徴が指摘できるからである。

『経済学例解』の破格の成功については、マーティノー自身も『自伝』において言及しているように、彼女の人生において大きな転換点となった(*Autobiography* 1: 177-81)。彼女はこのシリーズにより経済的に独立し、国内外で作家としての名声を確立した。ただし、シリーズに先立つ『同盟罷業』や『暴徒』では、この破格の成功は達成できなかったのである。

なぜなら、本論で議論している『同盟罷業』と『マンチェスター・ストライキ』を比較研究すると明らかに異なる点があるからだ。第1に、後者の物語としての完成度の高さである。『同盟罷業』が、テーマである、ストライキの無効性と労使双方への損害を伝えることに傾注している一方で、『マンチェスター・ストライキ』は同様のテーマを扱いながら、労働者であるウィリアム・アレンの人物描写と苦悩が詳細に描き込まれている。経済学の手引書という観点からは、この人物は新しい思想を認識しているながらも、労働者側の指導者という立場から、組合運動を指揮しストライキを実行するという役回りとなっている。彼の苦悩は何のために必要なのであろうか。

彼は組合の幹部ながら、当初からストライキに対して懐疑的な人物として描写されており、『同盟罷業』に登場するギルバート兄弟の性格や考え方の相違が、複層的に彼の中に造形されている。つまり、物語の主人公として、前作より格段に複雑になっている。当初はストライキに反対しながらも、組合という組織の中で、決断し実行せねばならないアレンに寄り添って、物語は語られていく。同時に、James Hargravesの多軸紡績機や、Richard Arkwrightの水力紡績機等により、以前のような労働者数を必要としなくなっている当時の綿織物業が置かれていた状況が説明されている(*Manchester Strike* 105-106)。

加えて、アレンの8歳の娘 Martha を通して、児童労働の過酷な状況が次のように描かれている。

The little girl repaired to the factory, sighing at the thought of the long hours that must pass before she could sit down or breathe the fresh air again. She had been as willing a child at her work as could be till lately: but since she had grown sickly, a sense of hardship had come over her, and she was seldom happy. (*Manchester Strike* 64)

マーサは夜勤もこなし、朝まで工場の中に閉じ込められ、休むことなく働き続けねばならない。長時間立ち続けているために膝を悪くしているが、一旦腰を下ろせば寝入ってしまい、監督に叱られることになる。仕事を休めば、膝は回復すると医者に言われるが、アレン家の経済状況ではその余裕がない。8歳の子供が夜勤で働き続けなければならないことが、アレン家の貧困を象徴するものとして、語られているのである。マーサは膝のみならず、工場内の綿埃のために、咳もしている。実際に綿紡績工場では、綿糸による肺疾患になる労働者が非常に多かったのである。厳しい環境下で、病を抱えながら働き続けるマーサであるが、彼女をさらに追い詰めていくのがストライキである。なぜなら、父がストライキに参加し収入が途絶えると、マーサはペットの犬や鳥を売らねばならない状況に陥る。

“You see, my dear child, we have sold almost everything we have; and when we can scarcely get food for ourselves, it does not seem to me right to keep animals to feed. This was why I sold the dog so many weeks ago.”

“But, father, it is only just a halfpenny now and then. Mother has always found me a halfpenny now and then for Billy [her bird’s name].”

“A halfpenny is as much as to us now, child, as a guinea is to some people; besides we could get money by Billy. Ah! I knew it would make you cry to say so.” (*Manchester Strike* 116)

半ペニーの鳥の餌代を惜しみ、その鳥を手放すことにより得る僅かな収入さえ、この一家の経済状況からは不可欠のものとなっている。マーサの慰めとなる小鳥さえも売り払わねばならない貧困状況は、ストライキを実行することにより彼らが陥る状況として描かれ、同時に、マーサの父親であるアレンの苦悩を語るものとなっている。

ここでマーティノーは明らかに読者の理性ではなく、感情に訴える手法をとっている。経済学の理論を解説するという観点からは、むしろ迂回とも考えられる挿話であるが、読者が物語を読み進めていくことを促す重要な要素となっている。労働者階級の登場人物や彼らの生活を詳述する場面で、感傷や哀感が読者に生じるような展開が配置されている。

つまり、マーセットの『経済学対話』が、簡潔に経済学の理論を問答により解説し、マーティノーの『同盟罷業』が、物語としては単純化され、登場人物も平板であったのとは異なり、『マンチェスター・ストライキ』は、手引書としてのみならず、物語として楽しめるように改善されている。

端的に言えば、『マンチェスター・ストライキ』は、文学として読むことのできる物語となっているということである。同時代の文学の特徴ともいえる「教え樂します」という役割を、十分に持った物語として評価できるのである。それゆえに、同時代の人々は、経済学の解説書というよりは、物語として楽しんでいたことが下記の引用からも推測できる。

Perhaps the best example of this kind of literature is the *Illustrations of Political Economy* by Harriet Martineau (1802–76). As an attractive medium for imbibing the lessons of economic science the *Illustrations* was without equal in its day—its success was astounding. . . . Almost the entire periodical press, daily, weekly, and monthly, received it with glowing praise. Readers as diverse as Victoria and Coleridge waited anxiously for each new number. (Blaug 129–30)

ブローグが言及するように、王位に就く前のヴィクトリア王女や、詩人のコールリッジが心待ちにしていた『経済学例解』とは、手引書としてよりも、物語としての魅力を語るものである。さらに、ヴィクトリア朝の女性作家である Mary Russell Mitford は『経済学例解』の理論は読み飛ばし、物語だけを楽しんでいたと告白している (Courtney 236)。このような読み方は、『経済学例解』の各巻が、物語と巻末にある “Summary of Principles illustrated in this Volume” (「この巻で例解された理論のまとめ」) から構成されていたことによるものである。「理論のまとめ」を読まずに、物語のみを読むことが可能であったのだ。もちろんそのためには、物語が独立して読める質を持っていることが不可欠である。確かに、マーティノーの意図したように、経済学の手引書として読んだ読者もいたのだが、同時に物語として楽しんでいた読者層がいたことも明らかである。このような『経済学例解』の複層性が、このシリーズの成功を支えるものと考察できる。

『経済学例解』の成功は、当時破格のものであった。1834年までにシリーズの月刊販売数が1万部に達したとされ (Freedgood 36)、マーティノーは『自伝』の中でその成功を詳細に述べている (*Autobiography* 1: 177-81)。彼女自身は自らの企画が労働者たちに必要なものであることを確信して、『経済学例解』を出版したわけであるが、実際の成功は彼女自身の予想をはるかに超えたものであった。その反響は、ノリッジにある彼女の自宅への郵便を手押し車で届けなければならないほどに大きなものであり、彼女自身もロンドンへと住居を移すことになる。これ以後は経済的な心配はなくなり、仕事に困ることもなくなる、まさに彼女の人生における大転換点となったのである。

しかし、『経済学例解』は、マーティノー自身にとり女性作家としての地位を確立するシリーズであったのみならず、19世紀の文学においても重要で画期的なものとなった。最後に、早くから、マーティノーの業績について注目し再評価を進めてきた Valerie Sanders のマーティノーへの評価を引用したい。

Her [Martineau's] tales discussed all the most topical questions that were agitating the country in the 1830s, at least ten years before the major Victorian novelists began to consider them. Unemployment, the poor, true and false religion, the meaning of love and its importance, the role of women

in a changing society, parent-child relationships, education, trade unions, emigration, taxation, socialism, the French Revolution, Irish disaffection, the bank crashes, the replacement of men by machinery in certain industries: all these are topics covered by her *Illustrations* alone, though she often returned to them in her later works. (Sanders 195)

ここでサンダースが強調しているのは、『経済学例解』の先駆性と、その物語群の網羅性である。1840年代の社会状況小説の隆盛により、ディケンズやギaskellなどがこれらの社会問題を扱う10年も前に、マーティノーは『経済学例解』の物語を書いているのである。しかも、マーティノーの『経済学例解』は2年にわたり毎月刊行されたので、25巻で構成されている。つまり同時代の社会問題を網羅的に扱うことができていることも、このシリーズの魅力であった。

彼女の影響力は、国会議員や政府関係者から政府刊行物が直接送り届けられるほどであった。その影響力は当然その読者数によるわけである。人気小説家に比肩する読者層を獲得したマーティノーは、この後、ディケンズが刊行する雑誌などに小説を提供することにもなる。

本論で考察したように、『マンチェスター・ストライキ』において、マーティノーの意図は経済学の解説であったのだが、同時に、彼女の中に存在する物語る能力の萌芽が見て取れる。つまり、このシリーズの成功は、社会的需要を認識したマーティノーの政治的、経済的感覚によるが、彼女自身の文学的能力を看過できないということである。

端的に言えば、経済学の手引書として、マーセットとマーティノーを比較研究した場合、後者の破格の成功の原因は、表現形式である物語に存するといっても過言ではない。このように、『経済学例解』のシリーズを執筆する過程で醸成された彼女の文学的能力は、数年後に長編小説である *Deerbrook* (1839) の出版となり結実していく。これは、彼女の小説家として活躍できる文学的能力を、証明するものである。

こうして分析を進めてくれば、『経済学対話』から『マンチェスター・ストライキ』へ、対話から物語へと、表現形式の相違に関する分析は、文学史的には、社会小説の誕生を予測させるものとなる。同時に、マーティノーの人生においては、小説家、作家としての彼女の文学的能力を醸成するものであったことが明らかになるのである。

*本研究は JSPS 科研費 16K02456 「手引書としてのマーティノー『経済学例解』研究—物語による専門的知識の普及」による研究成果である。

注

- 1) *Oxford English Dictionary* によれば、“turn-out”は“a withdrawal of workmen from their place of employment by common consent; a strike”とあり、ストライキと訳してもよいのだが、原書のタイトルが“The Turn-Out”と後述する *A Manchester Strike* に使い分けられているので、日本語訳は「同盟罷業」とした。
- 2) 女性のための解説書であった『化学対話』は家庭教師のB夫人と二人の女生徒 Caroline と Emily の対話で構成されている。その成功を踏襲するように、『経済学対話』では、若者を読者対象としながらも、家庭教師のB夫人と女生徒キャロラインの対話となっている。
- 3) 『経済学対話』の後に出版された *John Hopkin's Notions on Political Economy* (1833) では、マーセットも労働者を読者として想定するように変わっている。

Bibliography

Primary Sources

- Marcet, Jane Haldimand. *Conversations on Chemistry in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained and Illustrated by Experiments*. 2 vols. 1806. London, 1809.
- . *Conversations on Political Economy in Which the Elements of that Science are Familiarly Explained*, 1816. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Martineau, Harriet. *The Rioters; Or, A Tale of Bad Times*. London: Houlston, 1827.
- . *The Turn-Out; Patience the Best Policy*. 1829. *The Slaughter-House of Mammon*. Eds. Sharon A. Winn and Lynn M. Alexander. West Cornwall: Locust Hill, 1992. 70–128.
- . *Illustrations of Political Economy*. 9 vols. London: Charles Fox, 1834.
- . Preface. 1832. *Illustrations of Political Economy*. 1: iii–xx.
- . *A Manchester Strike. Illustrations of Political Economy*. 3: 1–136.
- . *Harriet Martineau's Autobiography*. Ed. Maria Weston Chapman. 3 vols. 1877. Cambridge: Cambridge UP, 2010.

Secondary Sources

- Blaug, Mark. *Ricardian Economics; A Historical Study*. New Haven: Yale UP, 1958.
- 『リカアドウ派の経済学』馬渡尚憲、島博保訳、木鐸社、1981。

- Bodkin, Ronald G. "The Issue of Female Agency in Classical Economic Thought: Jane Marcet, Harriet Martineau, and the Men." *Gender Issues*. 17 (1999) 4: 62–73.
- Cooper, Brian P. *Family Fictions and Family Facts: Harriet Martineau, Adolphe Quetelet, and the Population Question in England, 1798–1859*. Abingdon: Routledge, 2007.
- Courtney, Janet E. *Freethinkers of XIXth Century*. London: Chapman and Hall, 1920.
- Dalley, Lana L. "Domesticating Political Economy: Language, Gender and Economics in the *Illustrations of Political Economy*." Eds. Ella Dzelzainis and Cora Kaplan. *Harriet Martineau: Authorship, Society and Empire*. Manchester: Manchester UP, 2010: 103–17.
- Freedgood, Elaine. "Banishing Panic: Harriet Martineau and the Popularization of Political Economy." *Victorian Studies*. Autumn 1995: 33–55.
- Hunter, Shelagh. *Harriet Martineau: The Poetics of Moralism*. Aldershot: Scolar Press, 1995.
- Hobart, Ann. "Harriet Martineau's Political Economy of Everyday Life." *Victorian Studies*, Winter 1994: 223–51.
- Kestner, Joseph. *Protest and Reform: The British Social Narrative by Women, 1827–1867*. Madison: Wisconsin UP, 1985.
- Logan, Deborah Anna. *The Hour and the Woman*. DeKalb: Northern Illinois UP, 2002.
- Polkinghorn, Bette. "Political Economy Disguised as Fanciful Fables." *Eastern Economic Journal*. VIII (1982) 2: 145–56.
- . *Jane Marcet: An Uncommon Woman*. Aldermaston: Forestwood, 1993.
- . "Jane Marcet and Harriet Martineau: Motive, Market Experience and Reception of their Works Popularizing Classical Political Economy." *Women of Value: Feminist Essays on the History of Women in Economics*. Eds. May Ann Dimand, et. al. Aldershot & Bookfield: Edward Elgar, 1995: 71–81.
- and Dorothy Lampen Thomson. *Adam Smith's Daughters: Eight Prominent Women Economics from the Eighteenth Century to the Present*, 1973. Cheltenham: Edward Elgar, 1998. 『女性経済学者群像』桜井毅監訳、御茶の水書房、2008.
- Sanders, Valerie. *Reason Over Passion*. London: Harvester, 1996.
- Scholl, Lesa. *Translation, Authorship and the Victorian Professional Women: Charlotte Brontë, Harriet Martineau and George Eliot*. Furnham: Ashgate, 2011.
- Watts, Ruth. "Harriet Martineau and the Unitarian Tradition in Education." *Oxford Review of Education*. XXXVII (2011) 5: 637–51.
- 出雲雅志「ジェイン・マーセットと経済学の大衆化」飯田博康他編『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社、2006.
- 桜井毅「ハリエット・マーティナーの登場」清水敦、桜井毅編『ヴィクトリア

- 時代におけるフェミニズムの勃興と経済学』御茶の水書房、2012：69-133.
- 松本三枝子『闘うヴィクトリア朝女性作家たち——エリオット、マーティノー、オリファント』彩流社、2012.
- 。「Harriet Martineau と Hannah More —政治・社会状況への危機意識と物語の役割」『愛知県立大学国際文化研究科論集』第18号(2017): 47-68.